

ミャンマーに 教育の灯を

①

ミャンマー南西部に位置するイラワジ管区は「中華鍋の底」と呼ばれる。雨期になると川が氾濫し、大地の3分の2が水に漬かるためだ。交通手段は船し



新校舎を建設するトービャー村で、子どもたちの歓迎を受ける平野喜幸さん

かない。水田がどこまでも広がる穀倉地帯は、年に4カ月、別の顔を見せる。

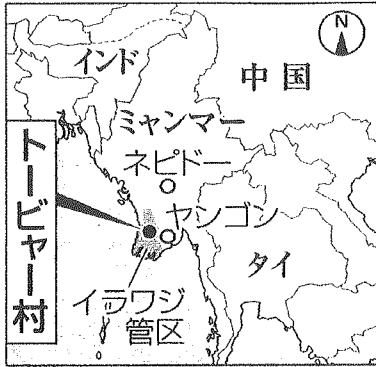
「あれが村です」。トービャー村の住民リーダー、ミンケン(42)が船上から指さした場所も「島」になっていた。1700人の村人にとって、悩みの種は子どもたちの将来。通える範囲に高校がなく、中学の校舎も足りないため、中学生の9割は

目的だ。「気持ち自立に向か

学校建設 自助努力育む

やる気があっても進学を諦め、働き手になるしかなかった。

「でも、日本からウーシータナ(慈悲の男)が来てくれて村



は変わった。学校はこれ以上ない贈り物だ」。そう呼ばれる日本人の名は平野喜幸(54)。熊本県玉名市のNPO法人「れんげ国際ボランティア会」のヤンゴン代表である。

平野の仕事は、単に学校を造るだけではない。その過程で村人の自助努力の精神を育むのが目的だ。「気持ち自立に向か

わなければ、学校を何校造っても、貧しい地域は貧しいまま」と平野は言う。

場所の選定で重視するのは親たちの熱意。村人には学校建設費の25%をまず出してもらう。

全員の汗と努力で集めたお金という条件付きだ。かなりの大金だが、お金は完成後に全額返還し、学校の維持や地域の開発などに使われる。

「たばこをやめて、お金を学校に回さない」と呼び掛ける

平野に、当初は苦笑していたトービャー村の人たちも、会合を何回も重ね、役割分担を決め、全員で資金集めをするうちに、目の色が変わった。「この村には団結力がある。自分たちの学校という意識もきつと芽生える」と平野は目を細める。

ミャンマーは11年制の教育制度を持つ。小学校(5年)の就

学率は96%だが、中学(4年)、高校(2年)はそれぞれ42%、32%と低迷。貧困に加え、学校が近くにないため途中で脱落するケースが多い。

教員不足も深刻だ。それを補うため、イラワジ管区では昨年度、大卒者を募り、三つの師範学校で研修を行った。その期間はわずか4カ月。平野は「仕事がないから来た人もいた。教合

「たばこをやめて、お金を学校に回さない」と呼び掛ける

アウン・サン・スー・チー率す

いる新政権になっても、ミャンマーの教育には課題が山積している。しかし、待っていても状況は変わらない。平野は毎日、村人に説明して歩いている。日本財団の資金を活用して2013年以降、43校を開校。今年も14校を建てる。国造りに少しでも貢献したい、その一心だ。

トービャー村で8月末、平野は村人総出の歓迎を受けた。「新校舎の建設は年内に始まります」と告げると、拍手が湧き起こった。涙ぐむ人もいた。平野は決意を新たにしていた。

「教育を待ち焦がれている人が、この国にはたくさんいる。立ち止まってなんかいられない」

(敬称略)

民主化にかじを切ったミャンマー。経済発展の恩恵が届かない農村に、教育の灯をともそうと奮闘する日本人ボランティアの活動を報告する。

(バンコク浜田耕治が担当します)

『西日本新聞』より転載

ミャンマーに 教育の灯を

④

「政府は頼りにならない。さて、どうするか」。緑鮮やかな



ターヤゴン村では、学生寮で暮らす生徒たちが放課後も勉強していた。ミャンマー南西部

水田が広がるミャンマー南西部のターヤゴン村。5〜15歳が学ぶ学校で、ソーハン校長(59)はため息をついた。

村は6月に学生寮を建て、教育の機会に恵まれなかった周辺の9村から生徒を集めた。しかし、校舎が手狭に。三つの学年は70〜90人を一つの教室に入

6千円で購入し、増築費の一部を捻出してはどうか。

伝えたかったのは「負担を分かち合う」ことの大切さ。ソーハン校長は提案を受け入れ、今後2年計画での増築を決めた。

平野の原点は高校時代にある。熊本県立玉名高1年の時、

ランティア会に入った。民主化にかじを切り、転換期を迎えたミャンマーで活動を始めたのは13年。日本財団からパ

ートナーになってほしいと頼まれ、平野は二つ返事で応じた。「軍政下で抑圧されてきた人々

の意識改革に貢献したい」と思ったからだ。

教師巻き込み奨学基金

れ、教師の負担も高まっていた。

「自分たちで校舎を増築しようにも、資金がどうしても足りない」と嘆く校長に、熊本県玉名市のNPO法人「れんげ国際ボランティア会」の平野喜幸(54)は一つの提案をした。

パナソニックが無電化村に無償提供している太陽電池ランタンがある。それを120個寄付してもらったので、村人らが1個

地理の授業で南北問題を学び、国際協力の道を志した。「なぜ世界で格差は生じるのか。若か

ったせいか、怒りを感じていた」と振り返る。

大学卒業後に実家の養豚業を継いだが、やはり夢を捨てきれず、1991年に佐賀市の国際交流団体に参加。青年海外協力量員としてのタイ派遣などを経て、2004年にれんげ国際ボ

ただ、当初は「金を集めている日本人がいる」といわされ、誰も信用してはくれなかった。

それでも村々を歩き、自助努力の大切さを説く平野の姿が評判を呼び、周囲の見る目も変わった。「人々が団結すれば、教育の灯は守れる」と平野は手応えを語る。

極め付きは、教師を巻き込んだ奨学金制度の創設だ。きっかけは女子生徒(15)の一言だった。「もし進学のお金がなかったらどうする?」と尋ねた平野に、生徒は答えた。「休みの日に工事現場で石を運んで働きます」

勉強熱心で実力もあるのに、家が貧しいために高校や大学に進学できない子どもが大勢いる。「困っている人を助けるのが仏教の教えではないのか」。平野の問い掛けはミャンマーの教師らを揺さぶった。

教師は薄給とされる。だが、イラワジ管区の二つの郡の教師3500人は毎月、給料から50円を寄付し、向学心に燃える生徒を上級校に進学させるための奨学金基金を設立した。

「外国の支援に頼らなくても、自分たちでやれることはある」。平野の活動は、イラワジの人々の意識を少しずつ変え始めていた。(敬称略)

『西日本新聞』より転載

ミャンマーに 教育の灯を

「あの時はがっくりきましたね」。ミャンマーで学校建設を続ける熊本県のNPO法人「れ



船に乗って目的地を目指す平野さん。「道なき道も行く」と笑った
＝ミャンマー南西部

んげ国際ボランティア会」の平野喜幸(54)には、苦い経験がある。後の成長にも影を落とす。

校舎新築を希望する集落は、建設費の25%を協力して拠出するのがルールだ。しかし、ある村では地元出身の実業家に泣き付き、村で集める金額の8割を寄付してもらっていた。平野は「全員が協力した」とうそを

つぎ、通帳に分割して入金する周到さだった。平野は後日、校長や村人を集めて告げた。「貧しいことは恥ずかしいことではない。貧しさを理由に努力しないことの方が恥ずかしい」と。皆うつむき、黙ったままだったという。

忘れられた英雄に学べ

「(賄賂などで)物をねだることを恥ずかしいと思っていない人物が上に立つと、国民もそうなる」と話す。

平野には忘れられない言葉がある。17年前、別のプロジェクトで、ミャンマー中部シャン州で開発支援を行った際、住民から言われた。

規範意識の欠如は、挙げればきりがなし。平野は「軍政時代のツケだ」と言うが、それは「ア

時、シャン州では複数の非政府組織(NGO)が活動し、農業研修に出席した村人に日当や昼食、50ギの化学肥料まで支給していた。

単に与えるだけの国際協力には意味がない。道のりは険しくても、諦めずに自立を促す。平野の活動の信念は、そうした過去の経験から生まれたもの

軍政に敬遠され、祖国の地を踏めずに亡くなったウ・タント。忘れられていた「国民的英雄」の生涯を学び、将来の目標にしてほしいと、れんげ国際ボランティア会は教師向けの研修会や、子どもを対象にした読書感想文コンクールを続けている。

27校目となる新校舎の落成式で、あいさつに立った村人の言葉に平野は胸が熱くなった。「この学校から、ウ・タントのようになり、ウ・タントが育つことが、学校を造ってくれた日本の皆さんへの恩返しになる」

いつか、そんな日が来ると平野は信じている。敬称略

(浜田耕治が担当しました)

「あんたは仕事をくれるのか、それとも金をくれるのか」。当

出身。国立高校の校長も務めた

『西日本新聞』より転載